

加越線車両 最後の雄姿 譲渡先・鹿島鉄道が廃線

年度末で廃線となる茨城県の私鉄 鹿島鉄道（石岡市－鉾田市、二七 二キロ）で、昭和四十七年に廃線となった加越能鉄道加越線（小矢部市－旧庄川町、一九 五キロ）の二車両が走っている。同鉄道は買い取り手がなければ、年内にも解体する方針。製造された昭和三十二年から同じ外観で半世紀走り続ける人気車両は、鉄道ファンに最後の雄姿を見せている。



砺波平野を東西に結んだ加越線は、大正時代から農産物や木材輸送などに大きな役割を果たした。石動駅で北陸線、福野駅で城端線と交わり、通勤 通学でも利用された。車社会の進展に伴い利用客が減り、昭和四十七年に廃止された。

二車両は廃止翌年の四十八年春、鹿島鉄道へ譲渡された。全長一六 五メートル、幅二 七メートル、高さ三 九メートル。内外装は一新したものの外観は変えず、砺波平野から霞ヶ浦湖畔に舞台を変えて走ってきた。鹿島鉄道の輸送人員がピーク時の四分の一（約七十八万人）にまで減り、県と沿線四市が存続策を探ったが昨年末、廃線が決まった。

二車両は、修理用部品がすでに製造中止となっているため、故障しないように一日一往復限定で運行している。レトロ型車両として人気を集め、イベントなどでは連結して運行し、ファンを楽しませている。

ディーゼル音で調子がかかるという鹿島鉄道の佐々木和夫石岡機関区長（５８）は「正直さみしい。引き取ってくれるところがあればいいのだが」と話す。数百万円程度の移送費がかかるうえ、同鉄道による保存もメンテナンスを考えると難しいという。

鹿島鉄道で大正時代に使われた初代蒸気機関車が、日本カーバイド工業魚津工場（魚津市本新）の専用線で活用された後、現在は魚津市村木小学校で保存展示されている。鹿島鉄道の岩瀬知治鉄道部長（５８）は「鹿島鉄道と富山は何かと縁がある。富山の人にラストランを見に来てほしい」と話している。